No.15

有菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎｏ．１５

【Ｎコード】
Ｎ０８５２Ａ

【作者名】
有菜

【あらすじ】
ルキア視点。月の強さの理由を考え、いろんな人に尋ねる。

月（前編）

月は強い。傷を隠して輝き続けているのだから。

傷を受けても輝きを失うことのない月。

その強さの理由は何だ・・・？

今宵もまた、月は絶えることなく輝いていた。

早朝。

「一護、先に行くぞ」

いつものように私は小島が来る前に学校に向かった。

今日は授業が早く終わったので、いつもよりも少しばかり早く家に着いた。

「お前最近、妙に静かだな。昼飯のときも屋上に来ないし。啓吾が泣いてたぞ」

「妙に静か、とは無礼にも程があるな。別にたまには他の場所で昼食をとっても良いではないか。それに私はいつもと変わらぬ」

自分的にはいつもと変わっていないと思う。

今日はただ、気のうえで昼食をとっていただけのこと。
どこも変わってなどおらぬわ。
そう言って、窓の外を眺めた。
外はもう、真っ暗になっていた。
一護から夜食を受け取り、食べ終えようとしていた。
「・・・！！」
一瞬、虚の気配がした。
数秒遅れて指令が届いた。
「一護、行くぞ！」
「本っ当いつでもどこでもお構い無しに出てきやがるな・・・」
一護を死神化させて、虚のところへ向かった。
データによると、今回の虚は過去に死神を二人倒した奴だった。
長期戦に持ち込まれたが、それでもなお、一護は虚を倒した。
「さて、虚も倒したことだし、帰るか・・・って、ルキア、どうかしたか？」
「・・・いや、貴様は強くなったな」

「そうか？とりあえず家に帰るぞ」

部屋に戻り、一護はベッドに倒れこんだ。

まあ、当然だろう。

連日出現する虚を倒すのに毎晩寝不足だものな。

よほど疲れがたまっているのか、気が付くと一護は眠っていた。

ふと窓の外から月光が差し込んでくる。

今宵も月は輝いていた。

私はまだ、その傷を受け続けても輝いていられる強さが分からない。

私にも、理由が分かれば強くなれるか・・・？

そのときが、くるといいな・・・。

いつか・・・。

理由を突き止める為、今日は井上達と昼食をとった。

というより、誘われたといった方が合っているだろう。

「月って、どうしてあんなに輝くことが出来るのでしょう」

「月かー。何かに一生懸命になっているからじゃないの？」

一生懸命、か。

まだ何を意味するか分からないけど、少しは手がかりがつかめたような気がした――――。

月（後編）

「何かに一生懸命になってるんだよ。傷が増えるところは私たちには見えないけど、傷を受け止めているのは輝いて護ろうとしてるからじゃないかな？」

輝いて護ろうとする・・・。

「月も、やっぱり何かを護るために一生懸命なんだよ。誰にも護りたいものがあるように」

そうか・・・。

護りたいのか・・・。

月は何かを護るために傷を受け止めているのだろうか。

私は何を護りたい？

・・・私が護りたいのは――――――。

「そうですわね」

軽く返事を返してその場を離れ、家に向かった。

私の護りたいもの。

月は、護るべきものがあるから強いのか・・・？

傷を受け続けても、輝きは変わらない。

今日、井上達に聞いてよかったな。

部屋に戻り、外を眺めた。

夜食をとり、一護は下に降りて言った。

月は今宵も輝き続けている。

その姿は、正面から見ると綺麗だった。

傷を受けるからこそ、月は輝きを増すのではないか・・・。

「・・・！？」

背後から、身体を引きつけられた。

「お前、いつも窓から月を眺めてるな。どうかしたのか？」

「・・・月はなぜ、あんなにも輝いていられるのだろうな・・・」

「強くいられるからだろ？」

やっと見つけた。

私が一番護りたいもの。

「私は見つけたよ」

「何を見つけたんだ？」

「月のように護りたいものを見つけた。」

「何を護るんだ？」

貴様に言うのは気がすすまないな。

「だ、誰でも良かろう？」

「早く言えよ」

「くっ・・・。言わなければならぬか？」

「当然」

どうやら言わないと両の腕から逃れられぬようだった。

「・・・を護ると決めた・・・」

「あ？」

「だから何度も言わせるな！たわけ！私は貴様を護ると決めたといったのだ」

顔が火照ってきてくるのを感じた。

「じゃあ俺は、お前を護る」

「それでは私が護れないではないか！」

「どっちでもいいんだよ、そんなこと」

やっと答えを見つけられた。

何があっても護ってみせる。

今宵は月が最高に輝いているようだった――――――。

月（後編）（後書き）

やっとお題一つ目書きあがりました！

この調子で全て収めることが出来るのか・・・？

ブラウザを閉じてお戻り下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0852a/

No.15

2010年10月15日17時55分発行